

農福連携商品開発に取り組む

一般社団法人はーとプロジェクト



近年、農業と福祉を連携させる取り組みが増えている。これはどのような効果をもたらしているのだろうか？開設以来、農福連携に取り組んできた一般社団法人はーとプロジェクトを取り組した。



STORY₁ 休耕地を活用し、作物を栽培

障がい児や障がい者・高齢者の福祉事業を行っている一般社団法人はーとプロジェクトは2015年7月に設立。こども発達支援センターおりーぶ障がい者グループホームくろーばー・訪問介護（居宅介護）クオーレなどを運営しているが、2016年5月1日に開所した就労継続支援B型Fee（フィール）では、障がい者に生産活動の機会を提供し、就労に必要な知識や技術の獲得を支援している。

就労内容は利用者の希望により選択が可能で、内勤であればハンドメイド雑貨の製作や工場からの下請け作業があるが、開所当初から行っているJ.A.愛知北（JA）の管内では、農地は増大傾向なのだ。作物がない畠地は刈りや収穫など市内の農家の作業支援や、休耕地を借りて、スタッフと障がい者が一緒に野菜を育てている。

J.A.愛知北によると江南市内の農地のうち約25%が耕作放棄地で、これは県内でも高い割合だという。その理由は就農者の高齢化や後継者不足、諸事情による離農など。江南市内の農地は区画が狭い場所が多く、法人への委託が困難なため、休耕地は増え、荒れいくばかりである。そこでフィールでは約50か所（）のベ



5.5ヘクタール）の休耕地を活用しさらに栽培している。

STORY₂ 障がいに応じた作業内容で楽しく健康に

フィールで農作業に就いている利用者は10名ほどで、サツマイモの植え付けから収穫まで、すべて自分たちで行っている。特に大変な作業は夏の草刈りだ。約50か所の畠のうち1日で回るのは3か所ほどなので、すべての畠を回って最初に草刈りをした畠に戻る頃には、また草が伸びている。暑い夏は体力を消耗し、辛い作業となるが、自然栽培にこだわっているため、煙を回つて最初に草刈りをした畠に利用者の心身に良い影響を与えていたという。

農作業は重労働なイメージがあるが、フィールの農業担当者たちは意欲的に楽しみながら作業しているという。病気や障がいがあつても適用できる工夫をして作業を促すため、利用者の中には気分が安定したり、朝までぐっすり眠れるようになった人もいる。また身体に障がいがある人で体の運動機能が向上した人もいるそうだ。



「足りない労働力を少ない賃金で作業する存在と認識されている印象が少なからずあります。労力に対し工賃が十分に行き渡るよつな連携」を目標としている。農家と福祉それぞれが考える連携に対する考え方のギヤップを、どのようにして埋めていくかが今後の課題です。」

農業から商品づくりまで自立して行える仕組み作りに取り組み始めたはーとプロジェクト。海外での干し芋販売と、利用者が自ら得た所得で税金が払える世の中になることを願っている。

「責任、喜びを感じ、モチベーションアップにつながっている。」

と責任、喜びを感じ、モチベーションアップにつながっている。

「美味しかった」という声が、直接届くことで社会的役割

「美味しい」と言つた」という声が、直接届くこと

とで社会的役割

農業と福祉のメリットと課題



「スタッフのこども 大好きちやつと なっている」という

「美味しい」という

声が、直接届くこと

とで社会的役割

自分たちが育てたさつまいもが商品化されたことによって、利用者たちも、意識が大きく変わったという。売上高の増加は工賃アップにつながるだけではなく、購入した方の「美味しい」という声が、直接届くこと

とで社会的役割

自分が育てたさつまいもが商品化されたことによって、利用者たちも、意識が大きく変わったとい

う。売上高の増加は工賃アップにつながるだけではなく、購入した方の「美味しい」という声が、直接届くこと

とで社会的役割

自分が育てたさつまいもが商品化されたことによって、利用者たちも、意識が大きく変わったとい

う。売上高の増加は工賃アップにつながるだけではなく、購入した方の「美味しい」という声が、直接届くこと